飯田短期大学
2024年　3月

FD通信　No.16

飯田短期大学　FD委員会　　http://www.iida.ac.jp

よい授業にはよい勉強・研究が必要だ　　FD委員長　奥井現理

研究の世界にはGIGOという言葉があります。基礎基本をおろそかにして統計ソフトを使いそれで研究は事足れりと思っている未熟・不誠実な人たちを揶揄する言葉です。ガーベイジ・イン・ガーベイジ・アウト、ゴミを入れたらゴミが出てくるという意味です。まさに授業もそのとおり、もとがゴミしか準備されていない授業はどうアウトプットしようがゴミでしかありません。授業を良くするものは、最終的には圧倒的な量の勉強・研究しかないのだと私は考えています。

授業をするからには、自分が知っているというだけではまるで不十分です。その内容に人生で初めて触れる人、前提知識のない人たちがわかるよう組み立てなくてはなりません。陥りがちな勘違い・誤解を発展的に解消する道筋も想定しなくてはなりません。もちろん、想定通りいかないことのほうが多いです。相手は人間なのですから、自分一人の想定など簡単に超えてくると考えるべきでしょう。だからといって想定外のことが起こるのをおそれ、喋りまくって学生が既定路線から脱線するゆとりを与えないとか、情報量の多すぎるパワーポイント資料を時間いっぱい読み続ける、グループワークで自分に質問が来ないようにするなど、下の下だといわなくてはなりません。むしろ、十分に間を取って、脱線させるべきだとさえいえます。脱線したところで、それを有益な学びに変えるように授業を再編成すればよいだけのことです。こうしたことを可能とする教師に求められるべき力量は、結局は研究・勉強することによってしか養うことはできません。むろん、それは高等教育を超えたレベルで行われなくてはならないでしょう。中学の数学教師が高校以上の数学はわかりませんなどと言っているのでは中学生の脱線に耐える力量が極めてあやしいのと同様に、大学生の脱線に耐えるためには教員自身の学びが大学生の学ぶ内容をはるかに超えていなくてはならないのです。だからこそ、大学教員には相応の研究業績が求められますし、外国語能力など学問に必須の各種リテラシーを十分に備えていなければなりません。悪い例を挙げれば、行政文書をもとに書かれたメディア記事なりどこかの研究者の実験レポートの日本語抄録なりの内容を語って何事かを教えたつもりでいるようでは話にもならないでしょう。行政やマスコミ・抄録を超えたレベルで授業をつくるのでなければ大学の存在意義はありません。それこそ学生はスマートフォンがあれば大学になど行く価値はないことになります。

研究も授業をよくするためのものという目的を少なくともその一部として持っています。学生に教えるためには十分な背景がなくてはいけません。自転車操業のような準備と授業の繰り返しでは到達することのできない領域まで探究した経験がなくてはならないでしょう。そうしてはじめて、「想定外」は少しずつ「想定内」になってゆき、「想定外」のことをも「想定内」の学びへと変えてゆくことができるようになってゆく道が開かれるのだとわたしは考えています。「想定外」はその教員の想定がまだまだ狭いことを示す言葉だといってもいいくらいです。

授業をよくするというのは、小手先のことではありません。少しやれば嘘のようにできるようになる、いまはまだコツをつかんでないだけだ、などというのは目先の営利しかみえていない教材業者の宣伝文句でしかありません。誠実な研究者・教育者はそんな簡単な話はないと知っていなくてはなりません。ですから、FD担当者としては、よい勉強・研究を奨励するとともに、それを基礎として授業をよくしてゆく方策を講じてゆきたいと考えている次第です。

目　次

よい授業にはよい勉強・研究が必要だ　FD委員長　奥井現理　ページ1
＜FD研修会＞　シラバスの書き方　FD委員会　ページ2
＜寄稿：共学化＞
生活科学専攻主任　三浦弥生　/　教務委員長　奥井現理　ページ3
＜キャンパスライフに対する学生満足度アンケート実施結果＞　教務課主任　桑原真裕子　ページ4

＜FD 研修会＞　　～シラバスの書き方～

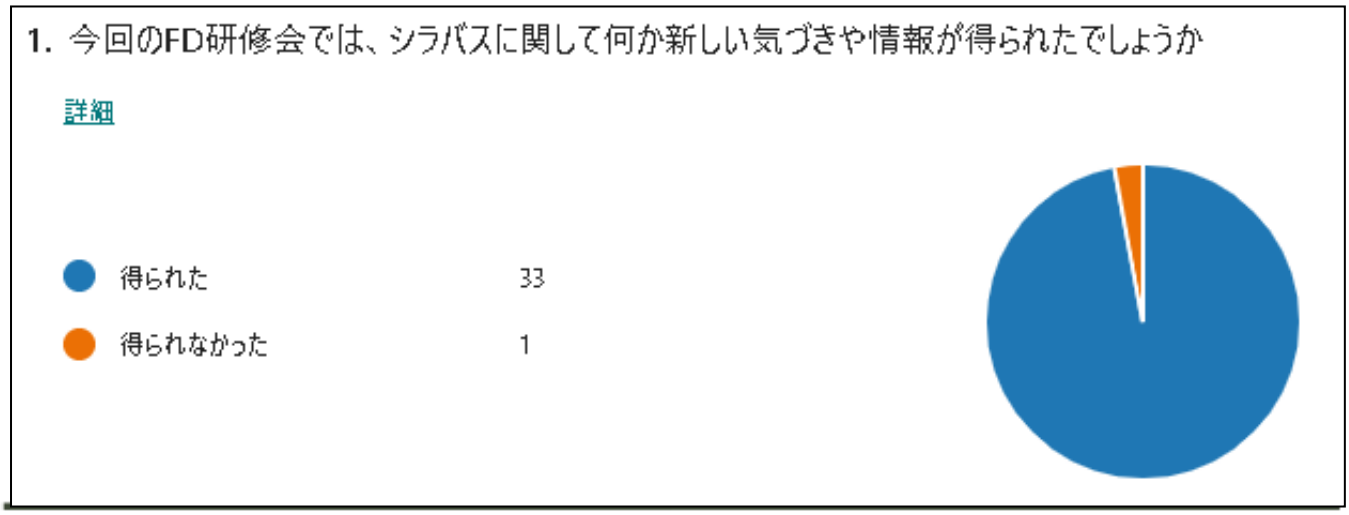
2024 年２月６日、FD 研修会が行われました。どの大学もこの時期はちょうどシラバスを作成する時期なのですが、シラバスの書き方というのは教員の裁量によるものが大きく、ノウハウ的なものが FD 委員会に蓄積されていませんでした。ここ 10 年ばかりで大きく様式も変わってゆき、そのつど担当部局から説明は行われるのですが、その後に入職してきた教員には全学的なガイダンスが漏れているということが起こってきました。そこで、シラバスの書き方を全教職員で共有する機会をこの時期に設けることにしました。

本研修では、本学で教職科目を担当されている中井文彦先生をお迎えし、委員長の奥井と対談する形式で行われました。スクリーンには六つのテーマが映し出され、それぞれのテーマに関して対談が行われてゆきました。

ただ、二人がしゃべっているのを聞いているだけでは、参加者にとっては動画を観ているのと大差ないものになってしまいます。ですから、時間の制約がある中、可能な限り多くの教職員に話に参加してもらえる機会を設けました。いきおい場は活気づき、その結果、古株の教員でも長年の謎になっていた箇所があること、とりわけ「講義」と「実習」の単位数と事前・事後学習の取扱いに関しては少なくない教員が不案内であったこと、評価の「観点」に関して多くの迷いやそれに対するアイデアがあること等、とても有意義なやりとりが行われることになりました。

後日、多くの参加者から、新しい気づきや情報が得られたという感想が寄せられました（下部円グラフ参照）。コメントも多く寄せられ、その中でもこれは新任研修に加えるべき内容であるという指摘がいくつもありまして、それはその通りだと担当者も考えますので、さっそく次年度から新任教員の研修に加えてゆこうと考えています。

従来、研修会と講演会とが一年に一度、交互に行われてきた FD 研修ですが、今年度は前年度にひきつづき研修会を開催しました。講演会はどうしてもその性質上、教える―教えられるの関係に近くなるため自分たちの課題を自分たちで解決するという意味合いが弱くなりますし、シラバスの書き方がノウハウとして共有されていないことは第一に自分たちで解決すべき喫緊の課題であると委員長が判断したからです。これを自分たちの手作りで和やかで有意義なものになるよう企画運営することに FD 委員会が全員で取り組みました。　　（FD 委員会）



＜寄稿：共学化＞　今年度は共学化初年度でした。各学科専攻に男子学生が入学する中、生活科学専攻にだけは男子学生がいませんでした。そういった意味では、これから男子学生を迎えるタイミングをとらえることのできるこれが最後の機会といえます。そこで、生活科学専攻主任に現時点で考えていることを寄稿してもらいました。次いで、多くの授業を担当している教務委員長が共学化に関して考えるところを述べます。

男子学生を迎えて

生活科学専攻　主任　三浦弥生

飯田短期大学と名称を新たにした学舎に、「おはようございます」と爽やかな男子学生の声が、これまでとは一味違う清々しさを運んできます。今年の春、男女共学になった本学に、開学以来初めて 24 名の男子学生が入学しました。入学当初こそ男子学生が固まって歩いている様子が窺えましたが、半年も過ぎると男子学生も女子学生も談笑しながら廊下を歩く姿が当たり前となり、学校全体が自然と共学に馴染んできたように思います。男女共学 1 年目を終えようとしているこの時期、目下の課題は来年度の男子学生の更衣室の拡張である、ということはとても悦ばしいことです。『うつくしく生きる』という本学理念に新鮮な風が吹き込んだ、そんな気がします。

共学化で変わるべきもの・変わるべきでないもの

教務委員長　奥井現理

わたしは全学科の授業を担当しています。ですから、わたしが所属している生活科学専攻の事情とは別に、男子学生の参加する授業も当然に担当しています。そんなわたしは今年度からの共学化にあたって、男子学生を迎える特別の準備は何もしていませんでした。男子学生が来るから変わるべきであるような授業をもともとしていないからです。むしろ、男子学生を迎えるから授業の何かを変えなくてはならない、特別の準備をしなくてはならないというものの考え方や心構えこそ改めるべきであると考えています。

2010 年に飯田に来る前には、わたしは高校や専門学校、予備校で授業を担当していました。高校は最初に共学一年目（男子校と女子高の合併により開始）の高校で英語を担当していましたが、当然ながら男子生徒がいるから女子生徒がいるからという授業は初めから行うことがありません。その後、女子高専攻科で講義を行うことではじめて女子教育に携わりましたがそれは週に一度のことでしたし、ほとんどの時間を過ごす予備校の教壇では大人の受講生相手（教員採用試験対策講座担当でしたから、すでに免許を得て学校で講師業を経験している受講生が多かったのです）で、それも当然に共学ですから、あまり性別を意識することのない指導を長年行っていました。そして 2008 年から、女子高校で英語を再び担当する機会を得まして、それから二年間女子教育に携わることになりました。同時に、保育系の専門学校でも授業を担当しましたので、ちょうど現在の飯田短期大学における男女比に近い授業も経験があります。わたしにほとんど、もしくはまったく経験がないのは男子校の授業くらいです。そうした経験から考えますに、女子だから、男子だから、共学だから、で変わるような授業は原則として行うべきでありません。そうした授業は結局性別になんらかの先入観を抱きそれに甘えている、もしくはそれを警戒しているような態度が見透かされることになりますから、いずれは信用を失ってゆくでしょう。

授業が扱うのは人類の共有財産である知識技能であったり、学問的真理であったりしますが、少なくとも私が扱うような内容には性別に依存するところは思い当たらないのです。当然にそれは授業方法も事情は同じです。有名な「ハインツのジレンマ」のような内容を扱うときであってもすることは変わりません。そうした内容への感想がいろいろであることにも性別による傾向は現時点で感じていません。

「ハインツのジレンマ」とは、米国の心理学者コールバーグが道徳性発達のモデル構築に使用した例題で、それに対する男女に回答内容の傾向差があったと報告されています。その後ギリガンが、男子は正義を女子はケアを重視するのであると主張し、現代にいたるフェミニズム論争の一部を構成するほどまでに議論が広がってゆきました。もちろん、違いはある、ただしそれは上下差ではないと主張することと、そもそも違いはないのだと主張することとはまったく別のことです。ですが、大自然の仕組みに違いや上下があること、もしくはないことをも見いだすのは自然それ自体でなくそれを認識するわたしたちの側であることを示しているともいえます。それならば可能な限りフラットな認識を保つよう努力すべきだと思わずにいられません。

キャンパスライフに対するアンケート（令和５年度）実施結果より

教務課主任　桑原真裕子

本学学生の学生生活に対する満足度を調査することにより、短期大学職員のあり方を見直し、業務改善及び施設設備の充実を図る一助とするために、毎年アンケートを実施している。そのアンケートから見えた結果と課題報告する。

令和５年度のアンケートは令和６年１月 17 日～24 日に本学に在籍する全学生にオクレンジャーにて実施した。質問項目は、対象者の属性、サポート体制、教育施設・設備についてとし、結果は単純集計し分析した。

その結果、回答者は 260 人（回収率 60.3%）であった。①サポート体制について、履修登録や単位取得について相談できる体制については、94.2(92.4 ＊カッコ内は昨年、以下同様)%が整っていると回答した。休講などの連絡が学生にわかりやすく情報提供されているかについては、86.2(76.6)%が提供されていると回答した。今年度導入した UNIPA 利用状況については、利用しているが 75.4%、利用していないが 23.9%、見方がわからないが 0.8%であった。学生便覧を活用しているかについては、60.4(65.4%)が当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した。学生生活について相談できる体制については、87.3(87.9)%が整っていると回答した。奨学金制度などの経済的サポート体制については 90.4(93.0)%が整っていると回答した。からだやこころの健康について相談できる環境があるかについては、「からだ」が 83.1%、「こころ」が利用者において 84.7%であった。進路・就職サポート体制について、全般的に満足しているかについては、91.9(94.4)%が当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した。職員の対応に満足しているかについては、全体として、当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した者が９割以上であった。個々の教職員対応への記述もあった。

②教育施設・設備では、講義室・実習室等の教育施設について全般的に満足しているかは、91.9(89.3)%が当てはまる・どちらかと言えば当てはまると回答した。自習スペースについては、十分と回答した者は 74.6(65.9)%、くつろげる空間では 77.3%であった。食堂や売店の充実に関しては利用者の９割以上に肯定的な回答がみられた。教室の空調の効きでは、十分と回答した者は 76.5(79.2)%であった。駐車場については、利用者の利用しやすさを見ると、当てはまる・どちらかといえば当てはまるが 72.3%であった。

以上の結果を踏まえて、本学としての課題を記したい。まずは、回答率が減少した点が悩ましく、来年度に向けて実施方法の検討が必要である。サポート体制では、履修、学生生活、健康のサポート体制は比較的整っているといえるが、こころのサポートについては利用状況を確認したい。学生便覧の活用については、前年度より下がっており、引き続き活用の方法について検討する必要がある。教職員の対応については、個々の対応を今一度確認し、さらなる向上を目指したい。教育施設・設備では、自習スペースの確保は伸びているがくつろげる空間と合わせて学生が使用できる場所の検討を重ねたい。空調、駐車場の整備は前年度に引き続き対応を進めていく。

最後に、ここで得られた結果を各部署で共有し、連携の下で検討及び改善し、学生の教育環境を整えていくように取り組みたい。

編集後記

FD 通信 16 号をお届けします。委員長が代わりましたが、全科目授業アンケート、FD 研修会等、基本的には前年度までの活動を引き継いで行ってきた様子と、今後どのような方針で活動が行われようとしているかを検討している様子が本紙面でお届けできていれば幸いです。

（編集担当：奥井現理）

飯田短期大学 FD 通信 No.16　（発行日　2024 年 3 月 31 日）
FD 委員会　委員長　奥井現理
委員　　桑原真裕子　富口由紀子　菱田博之　細田裕子　柄澤八代衣
※FD 通信へのご意見ご感想をお待ちしております。　fd@iida.ac.jp